

mayの研究

著者	三ツ石 直人
著者別名	MITSUISHI Naoto
雑誌名	東洋大学大学院紀要
号	54
ページ	291-305
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009713/



mayの研究

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

三ツ石 直人

1. はじめに

助動詞のmayは英語に触れていれば、必ずと言ってよいほど目にする語のひとつである。そのため、ある程度学習が進んでいれば、mayを見てその意味がまったくわからないということは、まずないだろう。だが、それは表面的な部分だけを見てそう思っているだけで、その深層部分まで掘り下げてみると多くの問題を抱えていると筆者は考えている。よって、本稿ではmayを取り上げ、その意味と用法について語源から考察する。Mayは、canやmust, will, shallと並び、頻繁に使われる助動詞であり、これらの助動詞は法助動詞と呼ばれる。それぞれ根源的用法（root use）と陳述緩和的用法（epistemic use）という2つの用法を持っている。根源的用法は主語に与えられた「意志」や「能力」、「義務」などを表す用法で、陳述緩和的用法は話し手の判断を表す用法である。Mayの場合、根源的用法は「許可」、陳述緩和的用法は「可能性」を表す。根源的用法は、その名の通り、その語の核となる用法である。Close（1975）では、根源的用法をprimary use、陳述緩和的用法をsecondary useと称していることから、根源的用法が法助動詞の主要な用法だとわかる。それ故、canやmustなどを辞書で調べてみると根源的用法が最初に掲載されている。だが、mayは最初に陳述緩和的用法が掲載されていることが多い。ここから、mayは他の法助動詞と違い、根源的用法よりも陳述緩和的用法の方が主たる用法ではないのだろうか。Mayの特異点はこれだけではない。Mayは祈願を表す動詞に続く名詞節や目的や譲歩を表す副詞節中で使用される。Mayの根源が「許可」だとすれば、意味上、関係のなさそうな従属節内で、なぜmayが使われるのか。ここまでに挙げた疑問以外にも、本稿ではmay wellとmay as wellの意味や、文法的に破格な二重助動詞を考察対象とし、mayという語について究明する。

2. Mayの意味

はじめに述べた通り、mayの根源的用法は「許可」で、陳述緩和的用法は「可能性」だが、歴史を遡るとOE期ではmægと綴っており、その意味は‘to have power’であった。現代

においてこの意味は廃れてしまったが、これがmayの原義であり、中核を成していることは常に意識すべきことである。この核となる意味に従ってYou may go in.という文を読むと、You have power to go in.となり、「あなたは中に入ってもよい」というよりも、「あなたには中に入るだけの力がある」と読める。「力がある」ということは、すなわち、「能力」を有しているということである。よって、mayの核にある意味は「能力」である。現代英語において、この「能力」の意味はcanに取って代わられてしまったが、これがmayの根源的用法である「許可」の意味のもととなっている。能力があれば、その人に任せてもよいと周囲の人々に思わせることができる。そのため、その人に許可を与えても差し支えがないという意識が働く。ここからわかるように、この「許可」は主語の「許可」ではなく、話し手の「許可」であることに注意していただきたい。「この人ならば、力があるからやってくれる、任せられる。だからやってもよい」という気持ちに話し手になり、主語に当たる人物に許可を与えるのである。

Mayの陳述緩和的用法である「可能性」も、「能力」の意味から転じてできた意味である。能力があるので、やればできるかもしれないが、実際にやるかどうかまでは踏み込んで述べていないし、そこにはwillやmustのような意志も義務もない。また、やってみたところでできなかったということも十分にあり得る。その結果、遂行されるかどうかはわからないという確信度の低い可能性を表す。これは多くの英英辞典でmayの意味を‘possibility’という語を使って説明していることから明らかである。‘possibility’という語は、「するかもしれないが、実際にやるかどうかは不確かである」という意味である。したがって、mayの表す「可能性」は、やるかもしれないし、やらないかもしれないという意味を表しているのである。

- (1) A lot of the birds *may* have been killed by gun clubs. (BNC^註)

(たくさんのその鳥たちは銃の愛好家団体により殺されたのかもしれない)

- (2) I think some of you *may* possibly have seen this view-graph before. (BNC)

(あなたたちの何人かは、ひょっとしたらこのスライドを以前、見たことがあるかもしれませんね)

(1) は、実際に銃の愛好家団体によって殺されたかどうかは不確かであることを表している。また (2) は、スライドを見たことがあるかどうか、はっきりとしたことは言えないが、見た人もいないかもしれないということを意味している。(2) の例では、I thinkやpossiblyという語句が使われていることから、断定を避け、話し手の確信度が低いことを表していることがわかる。

最後に、1節で挙げた辞書における掲載の順序に関して触れることにする。大した問題ではないと思われるかもしれないが、これもmayの特徴を表すもののひとつなので、ここで記

述することにする。英和辞典、英英辞典を問わず、多くの英語辞典ではmayは根源的用法の「許可」の意味よりも、陳述緩和的用法の「可能性」の意味を先に掲載している。これは、「可能性」の意味の方が歴史的に古く、mayの本質に最も近いことが要因であると思われる。OED²によると「可能性」の方が「許可」よりも先に生まれた意味である。すなわち、「可能性」の意味の方が古くから存在しているのである。古くから存在しているということは、mayの核により近く、その本質をよく表していると言える。換言すれば、「可能性」の意味はmayの中心義である。「可能性」がmayの中心義だとすれば、その意味で使われる頻度も必然的に高くなる。事実、語の意味を使用頻度順に掲載しているジーニアス英和辞典(2014)では、最初に「可能性」の意味を掲載している。以上のことから、「可能性」の意味が最初に掲載されるのは、使用頻度の高さ故であり、使用頻度が高くなるのはmayの中心義であるからだと考えられる。

以上のことから、mayは歴史的に言っても使用頻度から言ってもmayの主たる用法は「許可」というよりも、「可能性」である。したがって、mayを見かけたときには、まず「可能性」の意味を疑ってみるべきである。

3. 従属節内におけるmay

2節では歴史的に考察し、mayの中心義が「可能性」であることを主張してきた。Mayは祈願を表す動詞に続く名詞節や、目的や譲歩を表す副詞節の中で使用されるといった語法があるが、このような語法も「可能性」の意味を反映した結果として生まれた語法である。

3.1 祈願

「祈願」を表すmayは、hopeやwish, prayのような祈願や願望を表す動詞に続く節内で使用される。

- (3) Police hope someone *may* have seen her driving her distinctive Renault car. (BNC)
(警察は、彼女が特徴的なルノー車を運転しているところを見かけたという人がいてほしいと思っています)
- (4) He wished they *might* share this brief delight. (COHA)
(彼は、彼らがこの束の間の喜びを分け合えることを願った)
- (5) Now that Tony Bland has died, we pray that he *may* rest in peace. (BNC)
(トニー・ブランドは亡くなってしまったので、私たちは彼が安らかに眠れるように祈ります)

(3-5) の節内で使われているmayについてOED²には、仮定法現在の代用としている。仮定

法現在が使われた節は話し手の想定を表しているだけで、まだ実際に起きていないことや起きるかどうかわからないことを意味する。すなわち、(3-5) の名詞節も、本質的には仮定法現在と同じなので、まだ実際に起きていないことや起きるかどうかわからないことを表している。また、Jespersen (1961:86) は上記の (3-5) と同様の例を示し、“the idea of possibility refers to a future time, and thus *may* comes in itself to denote futurity, though of a vaguer and more uncertain kind than *will*.”と述べている。ここから、まだ起きていない事柄に対して起きるかどうかわからないということを述べるのが、この「祈願」の*may*の役割なのである。この確信度の低さ故に、仮定法現在の代用として使用される*may*は「可能性」を起源に持つと言える。さらに、動詞の性質も考慮すれば、「実際にできるように」という願いも込められているようにも感じられる。つまり、*may*の原義である「能力」の意味も影響していると言える。また、「祈願」の*may*は名詞節ではなく文となっているものもある。これもまた、仮定法現在の代用表現として生まれた語法である。

(6) *May* he rest in peace! (BNC)

(彼が安らかに眠れますように！)

3.2 譲歩

複合関係詞や*though*などのような譲歩を表す接続詞により導かれる副詞節内でも、随意的に*may*が使用される。

(7) And *whatever* he *may* have tried to gain from me, he also gave me a great deal.

(BNC)

(そして、彼が私から何を得ようとしたとしても、彼もまた私に多くの物を与えてくれた)

(8) I'll just send you a little champagne to prove that *though* I *may* be a prude I'm not a puritan. (BNC)

(お上品ぶっているかもしれないけれど、ひどくお堅い人間でないという証に少しシャンパンを送りましょう)

(7, 8) で使用される*may*は、多くの文献では「譲歩」の*may*と言われているが、これも「可能性」を表す*may*に分類される。それは、祈願を表す動詞に続く名詞節同様、譲歩を表す節も古い表現や格式ばった表現では仮定法現在を使用しているからである。次の (9) はことわざであり、*though*により導かれた副詞節内では仮定法現在が使用されている。

- (9) Though the sore *be* healed, yet a scar may remain.

(痛みは癒えても、傷跡は残るだろう)

3.3 目的

So [in order] that節のような目的を表す節内では、法助動詞が使用される。

- (10) Some organisations print a sheet of miniature photographs so that editors *may* choose which, if any, they would like to have. (BNC)

(欲しい写真があれば編集者たちが選べるように、縮小された写真を印刷する機関もある)

- (11) The date of the first performance was delayed, in order that the singers *may* learn their parts more thoroughly. (BNC)

(歌手たちが自分のパートをより完璧に覚えられるよう、最初の公演の日付を延期した)

この目的を表す節内で使用される法助動詞に関してSwan (2016: § 588) は、“They are often followed by auxiliary verbs such as *can* or *will*; *may* is more formal.”と述べている。引用部の“*They*”は、so [in order] that節のことを示しているのだが、このSwanの説明によれば、節内でたびたび使用されている助動詞は、*will*や*can*であるとわかる。だが、セミコロンの後ろにある*may*の説明には「頻繁に使用される」との記述がなく、“more formal”と述べられているだけである。この比較対象は当然、*can*や*will*であるが、*may*が*can*や*will*よりもformalとされているということは、格式ある文で使われるso [in order] that節内では、*can*や*will*よりも*may*が好んで使用されるということである。一方、口語など日常的に使用する場合には*can*や*will*が優先されるということになる。また、formalということは、‘so [in order] that S may V...’という表現は、古くに成立し、慣習化された表現ということである。NOWを使ってso that節内で使用される*will*, *can*, *may*の頻度を比較してみると、*will*が9,565例、*can*が114,161例、*may*が4,542例という結果になった。また、COHAを使い、NOWと同じように比較してみると、*will*が1,164例、*can*が3,030例、*may*が1,772例となった。どちらのコーパスを使用しても*can*の使用頻度が最も高いことから、*may*は早い段階で*can*に代わったと言える。また、現代英語を多く含むNOWで*may*よりも*will*の方が多く、NOWと比べて古い英語を含むCOHAでは*may*の方が多いことから、現代に近づくにつれて目的を表す節内では*will*が*may*に取って代わられつつあることがわかる。では、なぜ*may*が初期段階で目的を表す節の中で使用されるようになり、その後*will*や*can*の使用が増加してきたのだろうか。LDOCE⁴によれば、目的を表す節内で使用される*may*について、“to say that someone does something in order to make something else possible”との記述がある。この説明から、「何

かを可能にする、できるようにする」という「能力」や「可能性」を表すためにmayが使用されるということになる。「能力」や「可能性」を表す法助動詞と言えば、canであるが、それよりも早くに「能力」や「可能性」を表していたのはmayである。そのため、目的を表す節内でmayがcanよりも早くから使用され始めたものと思われる。そこから、canが「能力」や「可能性」の意味を表すようになるにつれ、mayよりも頻繁に目的を表す節内で使われるようになったと考えられる。

一方、willの使用頻度の増加に関しては節が表す「目的」の意味が関わっている。目的とはまだ成し遂げていないことに対し、達成しようとする事柄を表す。まだ成し遂げていないということは、節が表す内容には必然的に未来性を帯びる。その上、「目的」という意味から、達成しようとする意志も現れる。これらが関係して、willが使われるようになってきたと考えられる。

4. May wellとmay as well

Mayを使った成句には、may wellとmay as wellがある。下記の(12-14)のように、May wellは「たぶん……だろう」と「……するのをもっともだ」という2つの訳例で、may as wellは「……した方がよい」という訳例で知られている。

(12) Raphael *may well* be in England. (BNC)

(ラファエルはイングランドにいるだろう)

(13) You *may well* say so! (BNC)

(君がそういうのももっともだ)

(14) We *may as well* say goodbye now. (BNC)

(もうさよならを言わないと)

4.1 May well

May wellはmayにwellが付与された表現である。Wellは“probably”や“with good reason”を意味する。両者の意味は全く関係がないように思えるかもしれないが、どちらもmayの表す「可能性」を感覚ではなく、論理的に明白にして確信度を高めようとしている。1つ目の“probably”はproveと同語源であり、そこには「証拠、根拠」が含意されている。2つ目の“with good reason”には「理由 (reason)」という語が含まれている。理由や根拠があれば、話し手の確信度は高まる。したがって、wellを“probably”の意味でとれば、「十中八九……するだろう」という意味になるし、wellを“with good reason”の意味で解釈すれば、「……するにはもっともな理由がある」となる。また、(15-18)のように、wellに修飾語が付加されたり、mayとwellの語順が反対になったりすることがある。

- (15) Ana likes you and *may very well* confide in you. (BNC)
 (アナは君のことが好きだから、君のことを信用するのも十分に納得がいく)
- (16) It *may quite well* be that the Neolithic inhabitants of Denmark showed their respect and affection for the dead by burying with them those things which in life they had valued most; with women, their ornaments, with warriors, their weapons. (COHA)
 (デンマークの新石器時代の人々が敬意や愛情を死人に示す方法は、死人と共にこの世で最も価値ある物、つまり、女性や装飾品、戦士や武器を埋めることだったのだろう)
- (17) The unfortunate truth is that increased segregation *may just well* be the price of peace. (COCA)
 (悲しいことだが、増加してしまった人種差別はまさに平和の代償となるだろう)
- (18) That *very well may* be true. (COCA)
 (それは十分にあり得ることだ)

上記の4例から、*may well*は熟語のような固定化された表現ではないとわかる。ここから、*may well*は*may*と*well*というそれぞれの語として考えるべきである。

4.2 May as well

*May as well*は*may well*に同等比較の[as... as~]が組み合わされている。そのため、*may as well*の本来の形は*may as well A as B*で、「AをするのとBをするのとは同じ程度の理由がある」という意味である。しかし、実際には*may as well A as B*は、[as B]が削除された形で使用されることが多く、BNCで*may as well*を検索したところ、186例中、[as B]が削除された例が185例で削除されていない例が1例であった。[as B]が削除されたとき、Bに当てはまる語は*not*であり、「しないのとするのとは同じ程度の理由がある」という意味である。これが*may as well*の核となる意味である。さらに、*may as well*は、英英辞典で以下のような説明がなされている。

LDOCE⁴: used to suggest someone should do something, because there is no good reason to do anything else.

OALD⁸: to do sth because it seems best in the situation that you are in, although you may not really want to do it.

両者の説明の副詞節に注目すると、「他にすることもないので」、「本当にやりたいわけではないけれども」と述べている。ここから、*may as well*の意味は「本当にやりたいわけでは

ないが他にすることもないので、するのとしなひのとて同じ程度理由があるのならば、してもよい」となる。これにより、may as wellは、積極的な気持ちではなく、消極的な気持ちを表すと考えられる。先に提示した(14)は、別れの言葉を言うことには消極的であり、別れの時を残念に思う気持ちを表しているのである。

5. May/might + aux.

Mayやその過去形のmightには、二重助動詞(double modals)と呼ばれる語法がある。Huddleston and Pullum (2002:105) に、“The modals are mutually exclusive. Except in coordination, they cannot combine...”と記述されているように、等位接続詞を使わずに助動詞を並列させると非文となる。

(17) *He will can swim soon. (Huddleston and Pullum (2002:105))

これに反して(18)のような文が、時に使われることがある。

(18) You *may can* fool him. (W. Faulkner, *The Sound and the Fury*)

(彼を欺けるかもしれないぞ)

(18)では、本来であれば非文とされる助動詞の並置がなされている。標準的な英語で書き直せば、“may can”ではなく、“may be able to”とすべきところである。BNCで“may can”の使用頻度を検索してみたが、用例は1つも見つけられなかった。当然のことだが、canをbe able toに変えて検索すると、761例ほど見つけられた。たとえ非文と言えども(18)のような例文がある以上、その詳細について考察していく必要がある。

まずは、二重助動詞の意味についてだが、上記の訳例にあるように、第一助動詞が陳述緩和的用法で、第二助動詞が根源的用法となる(Elsman and Stanley (2009:75))。これは[助動詞+準助動詞]にした時と同じである。

(19a) She knows he *must be able to* write some words, but she's never seen him do it.

(COCA)

(彼がいづらか言葉を書けるにちがいないと彼女は知っているが、その姿を一度も見ることがない)

(19b) First of all, you *can have to* speak about Iraq. (COCA)

(まずは、イラクについて話さないといけないでしょう)

(19a) の“must be able to”は、mustが陳述緩和的用法であり、canに相当する“be able to”が根源的用法である。その反対に、(19b) はcanが陳述緩和的用法で、mustに相当する“have to”が根源的用法である。これを踏まえて(18) の“may can”を読むと、mayが陳述緩和的用法でcanが根源的用法となることも理解できるだろう。この意味に関してAHD⁵で、“Since double modals typically begin with *may* or *might*, they lessen the degree of conviction or certainty (much like the word *possibly*) more than a single modal does.”と記しているように、(18) のmayは副詞的役割を果たしているのである。その一方で、第一助動詞も第二助動詞も陳述緩和的用法を表す例もある。

- (20) “She’s retching and bleeding,” the guy said. “She *might could* die.” (COCA)
 (「彼女は吐血している」とその男は言った。「万一のことがあれば死ぬかもな」)

このような二重助動詞についてDi Paolo (1989:198-199) は、断定を避ける役割を果たしていると述べている。(20) は、彼女が吐血しているため、男は死を悟るものの、その死に対して断定を避け、死に対するためらいの気持ちを表しているのである。この時の“might could”は似た意味の助動詞が“might or could”のように等位接続詞で結ばれ、ひとつの助動詞として機能しているものと思われる。つまり、意味の重複が生じているのである。似た意味の助動詞を重複させることにより、話し手の確信度を低いことを強調しているのである。

AHD⁵には二重助動詞の意味以外のことも解説している。やや長めの引用となってしまうため、一部抜粋してここに引用することにする。

- (A) In many Southern US varieties of English, *might can* be paired with other auxiliary verbs such as *could*....
 (B) Combinations such as *might could*, *might would*, and *might can* are known as double modals. Other less common combinations include *may can*, *may will*, and *might should*.
 (C) Although double modals *may* sound odd outside of the South, they carry little if any social stigma within the South and are used by speakers of all social classes and educational levels—even in formal instances like political addresses.
 (D) Like many features of Southern varieties of English, the use of double modals is probably due to the fact that many of the first English speakers in the South were Scotch-Irish, whose speech made use of double modals.

引用部 (A) より、二重助動詞はアメリカ南部の方言と言える。(18) の例も William

Faulknerの作品からの例であり、Faulknerがアメリカ南部生まれの作家であることから、これは明らかである。引用部 (B) では、二重助動詞のパターンについて述べているものである。これによれば、(18) は“less common”にあたる。(18) と同じ引用元にはもうひとつ二重助動詞を使用した例があるが、それも“may can”である。この作品だけで検証するならば、“may can”がcommonであるように思えるが、一つの作品だけでは検証にならないので、COCAとCOHAを使用して [may/might + aux.] を検索してみると、次の表のような結果を得られた。なお、表の数値は、COCAとCOHAの検索結果を合算した値である。下の表のイタリック体になっている助動詞は2番目に置かれる助動詞である。

	<i>will</i>	<i>would</i>	<i>can</i>	<i>could</i>	<i>must</i>	<i>shall</i>	<i>should</i>
may	3	0	2	3	1	1	1
might	1	5	9	79	0	0	2

以上の結果から、“might could”の例が群を抜いて多いことがわかる。よって、“might could”は二重助動詞の代表例と言える。AHD⁵の引用部 (B) の記述通りの結果となったが、さらに上の表より、mayやmightはcanやcouldとの共起が非常に多いことがわかる。これは、mayとcanという法助動詞の本質的な意味が酷似していることが原因である。また、mustやshallと共起する例はほとんどなかったが、検索された例は特徴的なものである。まずは、“may must”の例から見ていく。

(21) But I *may must dare* not love him. (COHA)

(でも、私はあえて彼を愛してはいけないのかもしれない)

この例には、たしかにmayとmustが並列されているが、さらにそこにdareが使われている。これは、言うなれば三重助動詞であり、他の [may/might + aux.] の例には見られない例である。続いて“may shall”の例だが、これはAHD⁵の引用部 (C) に該当する。

(22) When a defendant pleads insanity, as prescribed in Section 336, the court in which the indictment is pending, instead of proceeding with the trial of the indictment *may shall* appoint a commission of not more than three disinterested persons qualified experts to examine him.... (COHA)

(被告人が、336項で規定されるように、精神異常を主張するとき、裁判手続きをせず、起訴保留中の法廷は、彼を審理するため、多くても3人の公平な専門家としての資質のある人から成る委員会を任命することになるかもしれない)

(22) はCOHAからの引用だが、その出典を見ると*North American Review*という機関紙の“Medical Experts and the Homicide”という記事からの抜粋である。ここから判断すると、この例文は専門誌からの抜粋で、非標準的な英語が使われるとは考えにくい。したがって、(22) はAHD⁵の引用部 (C) を支持する例となり得る。

最後に、引用部 (D) の検証をしていく。引用部 (D) によれば、二重助動詞は、アメリカ南部に住むスコットランド系アイルランド人の口語とされている。つまり、二重助動詞の起源はスコットランド系アイルランド人にあり、さらに遡れば、スコットランドやイングランド北部で使用されていたことになる (Fennel (1993:434))。これを支持する例として、スコットランド人作家Sir Walter Scottの作品の例を提示する。

(22) ... how do ye ken but we *may can* pick up some speerings of your valise, if ye will be amenable to gude counsel? (W. Scott, *Rob Roy*)

(たぶんあなたのカバンがどこにいったかわかるかもしれませんよ。ちゃんと良い助言に従ってればね)

以上、AHD⁵による二重助動詞の解説を検証してきた。結果として、[may/might + aux.] に関してはAHD⁵の解説でほぼ網羅できると言える。しかし、may以外の法助動詞が最初に使われる場合に関しては言及されておらず、二重助動詞という文法現象全体で考えるとやや不十分である。本稿の目的はあくまでmayについて考察することなので、二重助動詞の研究は、また別の機会を設けることとする。

6. おわりに

本稿では、mayの中核を担う意味を重点に置き、現代英語におけるmayの意味や語法について考察を進めてきた。ここで最も述べたいことは、mayの意味の中心は「可能性」であるということである。Mayは根源的用法では「許可」を表し、陳述緩和的用法では「可能性」を表すが、真に根源に近いのは「可能性」の方で、そこからmayの様々な語法が生まれてきた。また、従属節内で使用されるmayに関していえば、「可能性」のみならず、その原義である「能力」の意味が多少なりとも関与していることも明らかになった。したがって、語の意味や用法について考察する際には原義を知り、それをよく観察し、意味の広がり方を考えていくことが大切である。これについては埋橋 (2013) を大変参考にさせていただいたことをここに記す。

最後に、本稿における論旨を箇条書きにして締めくくりにする。

- ・ Mayは「許可」と「可能性」を表す助動詞だが、その根源は「能力」である。

- ・ Mayの2つの意味のうち、「可能性」の方が歴史的にも長く、また使用頻度も高い。
- ・ 祈願を表す動詞に続く節や譲歩を表す節の中で使用されるmayは仮定法現在の代用であり、確信度の低い可能性を表すことがmayの採用の背景にある。
- ・ 目的を表す副詞節内でのmayの使用は格式体で、現代に近づくほどwillやcanの頻度が高まる。
- ・ May wellにおけるwellの意味は“probably”や“with good reason”であり、wellの役割は専ら、話し手の確信度を高めることである。
- ・ May as wellは「AをするのとBをするのでは同じ程度の理由がある」という意味が中心にあり、「本当にやりたいわけではないが他にすることもないので、するのとしなくて同じ程度の理由があるのならば、してもよい」という消極的な提案を表す。
- ・ Mayとmightは等位接続詞なしに助動詞を並置する二重助動詞と呼ばれる語法がある。その意味は、[助動詞+準助動詞]と同様の意味を表す用法と、二重助動詞がひとつの助動詞として機能し、断定を避ける用法がある。
- ・ 二重助動詞はアメリカ南部やスコットランド系アイルランドの人々にみられるdialectで、社会階級による差は見られない。
- ・ 二重助動詞の中で最も頻度の高い組み合わせは、“might could”である。

注：

本稿で使用したコーパスに関する詳細と略称は以下の通りである。

1. BYU-BNC: British National Corpus (本文中ではBNCと記す)：

期間：1980s-1993年, 収録語数：1億語, 対象国：現代イギリス英語

2. Corpus of Contemporary American English (本文中ではCOCAと記す)：

期間：1990-2015年, 収録語数：5億2千万語, 対象：現代アメリカ英語

3. Corpus of Historical American English (本文中ではCOHAと記す)：

期間：1810-2009年, 収録語数：4億語, 対象：アメリカ英語

4. NOW Corpus (News on the Website) (本文中ではNOWと記す)：

期間：2010-2017年, 収録語数：50億語,

対象：英語を使用する20カ国のオンライン・ニュースや雑誌の英語

参考文献：

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社。

埋橋勇三 (2013) 「語のイメージについて」 『白山英米文学 38号』 東京: 東洋大学英米文学科 1-18。

小野茂 (1969) 『英語法助動詞の発達』 東京：研究社。

- 柏野健次 (2010) 『英語語法レファレンス』 東京：三省堂。
- 齋藤秀三郎 (1954) 『助動詞用法詳解』 東京：吾妻書房。
- Close, R. A. (1975). *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- Coates, J. (2015). *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. New York: Routledge.
- Huddleston, R and G. Pullum (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1961). *A Modern English Grammar on Historical Principles IV, V vols*. London: George Allen & Unwin.
- Palmer, F. R. (1990). *Modality and the English Modals 2nd ed*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, M. (2016). *Practical English Usage 4th ed*. London: Oxford University Press.

参考URL：

[a] コーパス：

- BYU-BNC <<http://corpus.byu.edu/bnc/>>
- Corpus of Contemporary American English <<http://corpus.byu.edu/coca/>>
- Corpus of Historical American English <<http://corpus.byu.edu/coha/>>
- NOW Corpus <<http://corpus.byu.edu/now/>>

[b] 論文：

- Di Paolo, Marianna (1989). "Double modals as single lexical items" *American Speech* 64
<<https://www.jstor.org/stable/455589>>
- Elsman, Minta and Stanley Dubinsky (2009). "Double Modal Syntactic Patterns as Single Modal Interactions" *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 15
<<http://repository.upenn.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1076&context=pwpl>>
- Fennel, Barbara A. (1993). "Evidence for British Sources of Double Modal Constructions in Southern American English" *American Speech* 68 <<https://www.jstor.org/stable/455778>>
- Hasty, Daniel J. (2012). "We Might Should Oughta Take a Second Look at This: A Syntactic Re-analysis of Double Modals in Southern United States English". *Lingua* 122
<<https://msu.edu/~hastyjam/images/Hasty%20in%20press.pdf>>

辞書類：

- 『ジーニアス英和辞典 第5版』 大修館書店 (2014)。

『ジーニアス英和大辞典』大修館書店（2001）。

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』小学館（1994）。

Longman Dictionary of Contemporary English 4th ed., Harlow: Pearson Education, 2005.
(LDOCE⁴)

Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th ed., Oxford: Oxford University Press, 2010. (OALD⁸)

The American Heritage Dictionary of the English language 5th ed., Boston: Houghton Mifflin
Harcourt, 2016. (AHD⁵)

The Oxford English Dictionary 2nd ed., Oxford: Clarendon Press, 1898. (OED²)

A Study of *may*

MITSUISHI, Naoto

In this paper, the meaning and the usage of *may* are studied from the viewpoint of the original meaning. The spelling of *may* in Old English (OE) is *mæg*, and it means 'to have power'. The meanings of *may* which we know well, 'permission' and 'possibility,' derive from the original one. The usage of *may* is also related to 'to have power'. It is used in noun clauses following verbs which express a prayer, such as *hope*, *wish* and *pray* and adverbial clauses which show a concession or a purpose. *May* used in these clauses conveys 'permission', and possibly 'ability', which is replaced by *can*, because of formal or old usage. This paper deals with not only the meaning of *may* in subordinate clauses, but also the meaning of idioms, *may well* and *may as well* and double modals (for example *may can*, *might could* and so on). These studies are made with the aid of corpora which are BNC, COCA, COHA and NOW corpus.